

その雷は何処へ向かう  
のか

営業マン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

桑島慈悟郎に孫が存在したら、どんな剣士になつたのだろうかという物語。

悲しみを力に変えて、鬼殺隊に入隊することになつた彼は数々の鬼を滅し続ける。彼  
がたどり着く場所には何が待つてゐるのか。

目

次

プロローグ  
最終選別

初任務

36 19 1



# プロローグ

優しい母、厳しいながらも愛情を注いでくれた父。この人達の元に生まれてきて良かったと心の底からそう思えた。そして、歳が十三になつた頃好きな女性が出来た。一眼惚れだつた。女性は皆んな綺麗だと思うけど彼女は別格で綺麗だつた。

名前は小春。こはる同じ村に住む同じ歳で、可憐で、笑顔が似合う女の子だ。

「小春。俺が大人になつたら結婚してくれ！」

「……え、えつと、はい。私で良いんだつたら喜んで」

「ほ、本当にいいのか!?」

「不束者ですが、よろしくお願ひします」

俺の求婚に最初は戸惑つた様子だつたが、しばらくすると照れ臭そうに頷いてくれた。それを見た俺はわれを忘れるくらいに喜んだ。その様子を見てくすくすと笑う小春。時が経ち大人になつても、この幸せな日々が続くと思つていた。

でも、それは突然崩れてしまつた。

ある日晚、俺が住んでいた村が異形の鬼たちに襲われとうとう俺達が暮らす家の中まで入り込んでしまつていた。

父さんは俺と母さんを守る為に勇敢に立ち向かつたが程なくして殺されてしまう。そんな状況に俺は異様な程の身震いで震えているだけだったが、そんな俺を守るよう刃物を持ち異形に立ち向かう母の姿があつた。

「か、母さん」

「良い。征十郎。母さんがコイツらを足止めするから今のうちに逃げなさい！良い此処から遠くない所に貴方のお爺ちゃんが暮らしてゐる。その人を頼りなさい！」

母が震える手で刀物を持ち異形に立ち向かう姿を呆然と見ていて、今まで見たことのない顔をして振り返り俺を叱りつける。

「何をしてるの！男ならこれくらいでビビるな!!守る人がもう1人居るんじやないの!?だつたら早く行きなさい!!必ず母さんも後から行くから!!」

それを聞いた俺は家を飛び出して飛び出した。

「ごめんね。征十郎。貴方が大人になつた姿を見れなくて。でも、貴方なら大丈夫。立派な大人になつてくれるつて信じてるから。……私の息子を頼むわ。お父さん」

家を飛び出した俺は小春の家へと向かう。

「小春！此處から逃げるぞ！」

小春の家に入ると小春の両親は見るも無残な姿で朽ち果てていた。

「に、にげ…て、せい、じゅ…ろうさん…だけ、でもにげ…て。あいつ、が、…もどつ、  
てくるから」

「小春！」

そして、亡くなっている両親の隣で血まみれになっている小春を見つける。

「ご、…めん…なさい。やく…そく…まも、れなくつて…」

「何言つてるんだよ！俺と結婚してくれるんだろう！だから死ぬな！」

息も絶え絶えに喋る小春を抱き締めると僅かに俺の着物に触れる。

「わ、わ、わたしの…ぶ、んまで……なが、いきし、て…ね」

小春はそう言つた後力が抜けたように横たわる。

「…小春、誓うよ。必ず仇を討つ!!この村を襲つた奴を殺してやる!!!!…だから、ごめ  
んな。今から此処を離れる。また後から来るからその時にちゃんと弔うから待つて  
くれ」

小春を静かに寝かしてその場を後にした。

それからは走つて走つて泣きながら走つた。そして、朝になつて近くの町に辿  
り着いて意識を失つた。

「ちよつと困りますよ。慈悟郎さん！」

あれからどれだけの時間が経つたのか分からないが、どうやら俺は運良く誰かに拾われたようで、布団に寝かしつけられていた。

「良いから其処を退け！」

ガラツと引き戸を開けて杖をつきながら立派な鬚を生やし左頬に傷跡がある爺さんが横になつて居る俺の横に座つた。

「お前さんが征十郎か？」

「は、はい」

すると、その爺さんは手を伸ばし俺の頭を撫で始める。

「お前の事は彼奴からの手紙で知つておつた」

「あ、あの」

「ああ、言い忘れとつたな。儂は桑島慈悟郎。お前の爺さんになる」

その言葉を聞いて目を見開く。

「あ、あの母さん達が襲われたんだ」

「……もう、何も言うな」

俺はその言葉で全てを悟るが、望みを捨てるわけにはいかなかつた。布団に横になつていた体を起こし爺さんの服を掴む。

「そ、そう言えば、か、母さんは何処に？鬼を足止めするつて村に残つてるんだ！」

「もう何も言うなと言つとる!!」

爺の気迫が伝わつてきて黙るしかなくなる。

「……お前の母さんは勇敢じやつた。一人息子のお前を逃がす為に必死に戦つた」

「じ、じゃあ、母さんは？」

爺さんは俺の目をしつかりと見据えて、残念そうに瞼を閉じた。

「そ、そんな母さんまで」

服を掴んでいた手が自然と緩む。

「征十郎！しつかりせい！そんなんでは彼奴の望んだ男にはなれんぞ！じゃが、今は泣け。今だけは我慢するでない」

そう言つて俺を胸元に引き寄せてくれる。

「父さん！母さん！小春！！うああわああ！」

「頑張つたな。よう頑張つた」

しばらく爺さんの胸の中で泣きじやくる。

「征十郎。鬼を倒したいか？」

「つ！倒せるのか？だつたら俺は倒したい！皆んなの仇を討つんだ!!」

泣き止むのを待つて爺さんが鬼を倒したいかと尋ねるので迷わず決断する。

「その道は厳しいぞ！お前の母も僕が鍛えたから強かつた。だが鬼と戦いの末、怪我で剣を握れぬ体になつてしまい辞めてしまつたがな。そんな凄かつた母が負けてしまう程強い相手と戦う事になる。それでもやるか！」

「やる！俺は鬼を倒すんだ!!」

爺さんは俺の手をガツチリと掴む。

「なら、鬼殺隊に入ることじや。その前に修行をし、鬼を倒す方法を身につけなければならん」

「爺さん、これからよろしくお願ひします」

鬼殺隊。それは人喰い鬼を狩る剣士らが集まつた政府非公式の組織らしい。しかし、そう簡単に入れるものではなく最終戦別に生き残らなければならぬとの事だつた。

それでも俺は鬼殺隊に入る為、最終選別を突破する為に爺さんの元で世話になることを決め頭を下げた。

「分かった」

数日後、世話をしてくれた人に礼を言い、その場を後にして爺さんが暮らしている山で修行に入る事になつたが、修行に入る前に村があつた場所に爺さんと戻つてくると村は悲惨な状況だつた。

でも、皆んなの死体はどこにも無かつた。もちろん、父さん、母さん、小春の死体も無かつた。

爺さんの話では鬼は人を喰らうらしい。つまり、死体は残らないとのことだった。

「泣くならこれで最後じやぞ」

「泣かない。泣くわけにはいかない。仇を討つまでは」

きつく手を握りしめ決意を強くする。必ず仇は打つ。

あの鬼の姿は絶対に忘れない。

— 翌日 —

先程とは違った声が聞こえてくる。

「こら！こんな草原でサボつてないでさつさと起きんか!! 征十郎!!」  
「!!何すんだ！げ！」

修行を抜け出し休憩していたのが見つかり爺さんが俺を杖で叩いき起こしたようだつた。

「何がげ！・じや！・さつさと修行に戻らんか!!お前の覚悟とはそんなものなのか!!それでは仇を討つなど夢のまた夢じやぞ!!待つておるからすぐに支度せい！」

そう言うと爺さんはその場を去つて行つてしまつた。

「やるよ。やつてやるさ。俺は仇を討つんだからな」

起き上がりつて覚悟を口にすることで気持ちを引き締める。

「何をやつとるんじや！・征十郎!!もつと早く動かんか!!」

「はあ、はあ」

無茶言うなよ。あれから半年、毎日毎日朝から晩まで何回も仕掛けのある山を全速力で走つて登り降りされて足限界だつて。それに空気が薄いせいで上手く体が動かない。

「雷の呼吸は足を鍛えねばならぬ。怠るでないぞ！・さあ、次！」

「チツ！・くそ爺イー!!」

「くそ爺イーとはなんじや！・師範と呼ばんかー!!」

「くそ師範!!」

「くそをつけるなでないわーー!!」

次を行けという爺さんに対する怒りだけで一心不乱に山を走つて降りる。

「ヌアツ！ガツツ！」

足を滑らせて転び、勢いよく木に体を打ち付けた。

「痛え。……雷の呼吸を身につけて皆んなの仇を討つんだ！これくらいで折れてたまるか！」

痛む体を起こし、山を全力で降りる。

「はあ、はあ、次は登り」

乱れた呼吸を整えずに今度は山を駆け上がる。

「はあ、はあ、はあ、爺さん。後何本やるんだ」

「今日はもう終いじや」

「いや、後一往復やつてから休む」

もう休むように言われるが滝のように流れる汗を気にせず修行を続ける。

「全く、やる気がありすぎるのも困つたもんじやわい」

爺さんの心配をよそに再び山を全速力で往復してその日を終えた。

次の日。

「征十郎。次の修行に入るぞ」

「これは」

爺さんから渡されたのは刀。

「素振りじや」

「素振り？」

「朝から晩までその刀を振るんじや」

は？朝から晩まで？生まれて初めて握った刀を？

「儂が使う剣術は抜刀術。目にも留まらぬ速さで鬼を斬る」

爺さんがそう言つて持つていた杖を刀に見立て抜刀術の構えを取る。

「力を入れるのは一瞬」

そう言いながら刀の代わりに杖を振り抜くと同時に風が通り抜ける。

「このようにやつてみろ」

「は？」

凄すぎて素つ頓狂の声が漏れるが、それを気にしない爺さんは抜刀術の構えについて事細かく説明しだす。

「儂みたいになれとは言つとらん。じやが、その身に抜刀術を染み込ませるんじや  
「……舐めんなよ！ 爺さんと同じになるまで次の修行には移らない！」

それから毎日毎日朝から晩まで寝る暇さえ惜しんで教えてもらつた抜刀術を振り抜いた。雨が降ろうが、風が吹こうが、手に豆ができるも、それが潰れて刀を握るのさえ辛くとも、毎日毎日爺さんに教えてもらった抜刀術を染み込ませる為に必死に振り抜いた。

「爺さん、見てろよ！」

「ああ」

刀の素振りをしてから五ヶ月が過ぎようとしていた頃、爺さんを目の前に立たせて、抜刀術の構えに入る。

「っ！」

構えから素早く刀を抜き振り抜くとそよ風程度の風が爺さんの髭を揺らす。元鬼殺隊の柱だつた爺さんには遠く及ばないけど、初日とは比べものにならない進歩だつた。

「：おお！ 少しながら髭が揺れたぞ！ 征十郎！」

「どうだ！」

大したものだと嬉しそうに何度も頷く爺さんを見て誇らしく胸を張る。

「よし、これなら次に行けそうじゃな。抜刀術も身についたようだからな」

その言葉に力強く頷く。

次の修行それは体術。

「爺さんとやるのか？」

「当たり前じや」

爺さんは鬼との戦いで足を失っている為、まともに動けないのではないかと甘くみて  
いると

「心配無用じや。これくらいのハンデがあつて丁度良いくらいじや。さあ、かかつて來  
い」

心を見透かされた上に、甘く見られているとあつて勢いよく爺さん目掛け突っ込んで  
いく。

「後悔するなよ！・爺い！」

「っ！」

一瞬の出来事で分からなかつたが、一つだけ分かつていることがあつた。

「が！」

それは片足不自由な爺さんに投げ飛ばされているということ。地面に打ち付けられ  
呆然と空を見上げていると

「何をしておる。素早く立ち上がるんか」

その言葉にはつとし立ち上がつて、また爺さん目掛け突つ込んでいくが結果は同じで投げ飛ばされて終わつてしまふ。

「くそ。何で触ることすら出来ないんだ」

「征十郎。半歩、いや一步動き出すのが遅い！どうやつたら早く動けるのか考えるんじや」

あれから何度もやつても爺さんに触れる事すら出来ない状況に愚痴を零すと何が悪いのかを教えてくれた。動きが遅い。相手に間を持たせつてるつて事か？だつたらそれを埋める為の行動をすれば良いんだ。

「動き出しが遅い？だつたら」

集中力を高めて爺さんに向かつていく。

「答えは分かったか？征十郎！」

今回も爺さんに触れることが出来ずに投げ飛ばされるが、本当の勝負はここからだ。投げ飛ばされて宙を舞つている間受け身の体勢を整える。

「答えつていうのは受け身だろ」

地面に倒れるのではなく受け身を取り、すぐ様爺さんに向かつて突つ込む。

「その通りじや。これはどんな体勢からからでも素早く立ち上がる修行だつたんじや」

「だつたら最初からそう言えよ！」

受身から素早く立ち上がり突っ込んだものの結果は同じだつた。

「考えることも必要。それが成長に繋がる」

流石は元鬼殺隊の柱を務めただけあつて、爺さんの言葉に重みがあつた。

体術修行は一ヶ月間で終わり次の修行に移ることになつた。

「今までのは基礎中の基礎。今から全集中の呼吸、そして、型を教える」

「全集中の呼吸、型？」

爺さんが言うには体の隅々まで行き渡るように長い呼吸を意識することが肝らしい。

「そして、雷の呼吸は六つの型がある。それを全て宗次郎お前に教える」

爺さんは今までの修行で見せたことも無い、厳しい表情を浮かべながら事細かく全集中の呼吸、型について教えてくれる。

「違う違うではない！」

呼吸をしてみると途中でやり方が違うと持つてている杖で、胸、肺のあたりを爺さんに強く叩かれる。

「痛えな！」

「全集中の呼吸とは体中の血の巡りと心臓の鼓動を速くする。すると体温が上がり人間

のまま鬼のように強くなれるのだ。とにかく肺を大きくする。血の中に多くの空気を取り込む事で血が驚き骨と筋肉が慌て熱くなる。もう一回やつてみ」

話を聞くつもりがないのか俺の文句を無視して肺の使い方を説明する。話を聞かない爺さんに怒りを感じながらも胸に手を置き、もう一度、集中して呼吸をする。

「つ！がは!! 「違う！もつと長く！」

「分かつたから叩くなよ！」

「叩かれたくなかったら出来るようになるんじや」

呼吸は今までにないくらい厳しいものになつたが、つきつきりの指導もあつてか何とか身に付けることができた。

” すううう ”

” しゅうううううう ”

鼻から息を吸い、肺を大きくし、口から吐き出す。

「出来るようになつた事を考えれば、今のところは合格点じやな。だが、慢心するなよ。

征十郎。全集中の呼吸には上があるのだからな」

「……分かつてるよ」

コツとかそんなものはない。ただ、何回、何十回、何百回と呼吸をして身につけたも

のだつた。

「さて、次は雷の呼吸の型じやな」

全集中の呼吸を使う雷の型。

「氣負うな征十郎。お前なら出来る」

「やつてやるよ」

爺さんから雷の型を丁寧に説明され、全集中の呼吸を使いながら実際にしてみるがこれも簡単に出来るものではなかつた。それでも頭に、体に、骨に染み込ませる。只の知識で終わつてしまわぬないように。肺が痛くなろうが、腕がちぎれそうな痛みに耐えながら、足が動かなくなろうが必死に食らいつく。

そして、全集中の呼吸、雷の型を学び始めて半年経つた。

「どうだ爺さん」

「うむ、よくやつた征十郎」

雷の呼吸全て習得して、爺さんに認めてもらう事が出来た。

「もう儂に教えられることはもう無い。じやが、更に研ぎ澄ませる為修行場を変えると

する」

今までの山よりも標高が高い山に修行の場を移して習つてきした事の繰り返しをする事になる。

「征十郎、これをつけて山を降りるのだ」

「目隠しか」

渡された目隠しをつけ山を駆け出そうとした時、爺さんはまるで忘れていたかのように仕掛けの危険度が上がっていると言い出す。

「すまん、すまん忘れておつた。あと刀も持つて行け」

「わざとだろ」

目隠しをいるせいで爺さんの表情は見えないが、にやついているのが目に浮かぶ。

「この程度で死ぬようなら最終選別などでは生き残れん。その程度の男だつたという事だ」

「上等だよ。くそ爺い」

更に環境が険しくなつたのを気にせずに走りだす。

「（仕掛けの凄さ上がりすぎだろ。今までは間隔を多少空けた仕掛けだったけど、今回は  
間隔が曖昧で複数同時とかだし殺す気満々だな。でも、やばいという時は全身に電気が  
走ったかのような第六感が働くので助かる）」

絶え間なく自分を殺しにくる仕掛けに困惑しながらも、第六感が働いて特に怪我とい  
う怪我もなく突破していく。それが終われば刀の素振り。夜になれば木に登り、不安定  
な場所での全集中の呼吸。

更に修行を続け半年後。爺さんの元で修行し二年。ついに最終選別を受ける時がき  
た。

# 最終選別

## 最終選別

「征十郎。お前には才能がある。必ず生き残れる」

最近選別に向かう前の晩に爺さんと一緒に食事を取つていると、今まで言われた事のない褒め言葉をかけられる。

「何だよ。突然」

「儂の修行についてこれたのだ自信を持つて。弱気になるな。諦めるな。これだけ忘れないで大丈夫だ」

爺さんからの助言を聞き漏らさないように、励ましてくれていてのを無駄にしないよう頭に叩き込む。

爺さんとの食事を終えて、一息ついていると鬼について色々と教えてもらう。

「鬼も人と同じよ。基本的に人を食った分だけ強くなれる。力は増し、肉体を変化させ、怪き術を使うものも現れる」

そこまで言うと爺さんは部屋を出て行つてしまふが程なく刀を持ち戻つてくる。

「鬼には二つの弱点がある。一つは急所は頸だが普通の刃物で頸を斬つても殺せん。この刀の名前は日輪刀。特別な鋼で造られた刀だ。明日これを貸してやるから持つて行くといい。それともう一つの弱点。太陽の光だ。奴らは昼間は行動出来ない。奴らが行動できるのは夜だけなのだ。覚えておくのだぞ」

爺さんから日輪刀を受け取り明日に備える。

—翌日—

爺さんが用意してくれたお揃いの羽織りに袖を通して出発の挨拶を済ませる。

「じゃあ行つてくる」

「ああ。軽く突破してこい」

その言葉を受け、藤襲山へと向かう。

夜になりやつと最終選別が行われる藤襲山に辿り着くことが出来た。藤襲山と名前が付けられるだけあつて山の麓から中腹にかけて藤の花が咲き誇つていて、その景色に見惚れながら山に設けられた石段を登り終えると開けた場所に出る。

「こんなに最終選別を受ける奴がいるのか」

既に20名程の受験者がその時を待つてゐるようだつた。爺さん曰く、育手は山程いてそれぞれのやり方で剣士を育てるらしい。それが今日此處に集結し、最終選別を受けるのだという。

「ん？……なんだ彼奴ら」

気になつた方を見ると狐面をつけた宍色の男と同じ狐面をつけた黒髪の男が仲良く話をしてゐる姿が目に入る。

「皆さま、今宵は最終選別にお集まりくださつてありがとうございます。この藤襲山には鬼殺の剣士様方が生け捕りにした鬼が閉じ込めてあり、外に出ることはできません」刻限になつたからなのか藤の花が描かれた提灯を持つた一人の女性が場を仕切り始める。

「山の麓から中腹にかけて鬼共が嫌う藤の花が一年中狂い咲いてゐるからでございます」

この話は前置きで次の話が重要なのだと直感が働く。

「しかし、ここから先には藤の花が咲いておりませんから鬼共がおります。この中で七日間生き抜く。それが最終選別の合格条件でございます」

最終選別の合格条件を告げられ場の空気が引き締まる。

「では、いつてらっしゃいませ」

それを合図に奥へと足を踏み入れて いる。

◇◇◇◇◇◇

「まずは、この夜を乗り切る」

七日間生き抜く為には無駄な行動で体力を消費しないこと。その為には最も早く朝日が当たる場所、東側に移動するか。そうすれば体を休めることができる。

「！」

東側を目指して走り出してしばらくすると、止まつた方が良いと直感が報せるので動くのをやめ身構える。

「何処だ？」

「ち！ 感のいい餓鬼だぜ！」

少し先から鬼が姿を現わす。

「でも、それだけじゃ生き残れないんだよ！」

俺を食うためにこちらに向かってくる鬼を見据える。

(落ち着け！ 俺なら出来る！)

「 シイイイイ  
 ハ 全集中雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃 」

片足を引き、力を足に集中させ溜め前傾の居合の構えから一瞬で敵と間合いを詰めすれ違い様に一閃し、刀を鞘に収めた音と同時に鬼の頸が地面に落ちる。

(できた。あの修行は無駄じやなかつた)

後ろを振り向くと、さつきの頸を斬られた鬼はボロボロと姿が崩れ無くなつていく。(この刀で斬られると何も残らないのか)

完全に無くなつたのを見届けて東側を目指して再び駆け出す。

「ケヒヒ！久々の人肉じや！」

「 ハ 雷の呼吸 弐ノ型 稲魂 」

構えは抜刀術。雷の呼吸で得た力を逃さないうちに一瞬で五連撃を放つ。切り落とす場所は両腕、両足、最後に頸。

「大丈夫だ。やれてる」

「く、来るな——！」

雷の呼吸を使いこなし二体目を倒して一息つくと、悲鳴をあげながら俺の脇を通り抜けていく最終選別の受験者。

「怖いのは分かる。でも、覚悟がないなら参加するな」

「ヒヒ、そうだよな！」

今の奴を追っていた鬼が飛び掛ってくるが刀で払い距離を取った。  
「もらつたあ！」

すると横から別の鬼が飛び出してくるが、攻撃を食らう前に後ろに飛びそれを避ける。

「おい！俺の獲物だぞ！」

「うるせえ！早い者勝ちだろお！」

何方の獲物かと言い争う鬼達。

「　　雷の呼吸　肆ノ型　遠雷　　」

雷の呼吸は基本的に一対一得意とする流派だが、肆ノ型は雷の呼吸では数少ない複数を同時に相手する技それが遠雷。雷の呼吸で得た力を逃さないようにしつつ、体を捻る。そして、抜刀術の構えから一瞬で刀を振り抜くと共に溜めていた雷の力を自分を中心とした場所から広範囲に飛ばす。

「ぎあやああ！」

この技は鬼達には致命傷にはならないが、この攻撃には別の意味がある。鬼達は強度の雷に打たれ、原型を無くすほど焼き爛れるが

「馬鹿が！ 鬼の再生能力にこんなもの!!!」

「知ってるよ。でも、お前らの足は止まつて。全身の回復に力を回しているからだ。だから今、頸は無防備なんだろ」

「ま、待つて！」

致命傷にならずとも鬼を焼き爛れにしてその場に釘付けにする。その間に間合いに詰め寄ればいくら鬼といえど対処は難しい。そして、頸がある程度再生したところを続けざまに斬る。これが遠雷の真骨頂。

「何方にも食われてやるつもりはない」

崩れゆく鬼に目もくれずに先を急ぐ。

あれから八人の鬼を倒し、合計で十二人を倒した時。

「だ、誰かいないかーー!!」

遠くから助けを求める声にまたかと内心で悪態を吐くが、鬼に食わせてやるつもりもないでの向かうことにする。

「たすけてくれ！」

「落ち着け。それで鬼は何処にいる」

「あつちだ。さつき穴色の髪をした狐面をつけた奴が行つたんだ。あんなのに勝てるわけがない！」

穴色の髪の狐面？ああ、彼奴か！コイツの言つている奴に心当たりがあつたので直ぐに分かつた。

「分かつた。任せろ」

逃げてきた奴を更に逃がした後、言われた方へと駆け出す。

(どんな鬼かは分からぬがあの動搖は尋常じやない。急がないとまずいな)

「今、なんと言つた!!!」

(いた！何だあの手が幾つも生えた異形の鬼は?!鬼は元々は人間だつたと修行に入る前に爺さんから聞いだけど。一体人間を何人食つたらあんな醜い姿になるんだ！)  
「ふふふつ！何度でも言つてやる！鱗滻のせいで子供達は死んだ。鱗滻が殺したような

ものだ！」

「鱗滝さんは優しい人だ！あの人を悪く言うのは許さん！」

（馬鹿それは挑発だぞ！乗るな！）

探していた奴は既に異形の鬼と対峙している。近くにあつた木の影に隠れて会話を盗み聞きする限り大切な人を侮辱し、狐面の奴を挑発しているようだつた。

「　　全集中水の呼吸　壱ノ型　水面斬り　　」

狐面は跳躍しクロスさせた両腕から勢い良く水平に刀を異形の頸を斬る為に振つた。しかし、異形の鬼の頸を斬るはずだつた刀が頸に当たつただけで何故か折れてしまつた。

「終わりだな！安心しろよ。お前も殺した後で俺が食つてやるから」

（まずい！）

そう言うと異形の鬼はいくつもあつた手を一つに纏め、無防備な狐面に向けてそれを伸ばす。それを見た俺はあの狐面が死んでしまう事が容易に想像できたので、間に合うか分からなかつたけど急いで隠れた木の陰から飛び出す。

(諦めない！必ず助ける！もう誰も俺の目の前で死なせない!!)

「　　」 雷の呼吸 弐ノ型 稲魂　　」

狐面を掴もうとしていた腕を斬り落とし間一髪のところで狐面を救い出すことに成功する。

「誰だ!!」

異形の鬼は怒り狂っているがそれを無視し、狐面に目を向けると

「大丈夫か？狐面」

「あ、ああ」

「あれは俺が倒す」  
「大丈夫だ。彼奴は俺がやらなくちゃならないんだ。鱗滻さんのことを侮辱した彼奴だけは！」

「頭冷やせ！馬鹿が！そんな折れた刀で彼奴を倒せると思つてゐるのか！大切な人を侮辱

されて怒る気持ちは分かる。でも、今ここでお前が死んだらその人は喜ぶのか！もう一人の連れは悲しむんじやないのか！自分を責めるんじやないのか！そう言う事考えてから言え！！」

此處で死んでしまつたら大切な人がどう思うのか、一緒に来ていた連れはどうなつたのか分からぬが、もし、其奴だけが生き残つたらどう思うのか、考えるように伝えると彼は悟つたような表情を浮かべていた。

「なら、頼む！彼奴は俺の恩人を尊敬する人を侮辱したんだ。俺の代わりに倒してくれ！」

「……ああ。分かつた。必ず倒す」

視線を手が複数生えた異形の鬼へと戻して対峙する。

「話は終わつたか？お前も、赤色の餓鬼も俺に殺されて食われるんだからな」

「俺も、こいつも此處では死なない」

駆け出して間合いに入ろうとするが、手が伸縮自在、斬つても直ぐに分裂する手が近づくのを阻もうと邪魔をしてくる。

「手を斬るだけじゃ俺は倒せないぞ」

「分かつてるよ。そんなこと」

無数に伸びてくる手を斬りながら異形の鬼に向かう。

（何だ下から嫌な気配が！）

「ち！飛びやがったか！勘がいいな！」

地面からも手を出せるようで、間一髪のところで飛び上がって躱す。

「でも、空中では避けられないだろう！」

さつき狐面にした攻撃。複数あつた手を一つに纏めて無防備な俺へと伸ばす。

「！」

咄嗟に刀を握り返し、俺を掴もうとした手を刀の棟で押しとどめ、その時にできた反動を生かして前申し手を完全に躱す。そして伸びきった腕に着地し頸めがけて駆け出した。

「刀の棟で押しとどめた力を利用して躱しやがった！」

慌てた様子の鬼は頸の辺りからも手を生やし、間合いに入られるのを止めようとするがそれを全て斬り防ぎそして、刀を收め抜刀術の構えをしながら間合いに入つた時、鬼が焦った表情が見えたが関係ない！

「俺を倒せると思つてゐるのか？！お前<sup>ご</sup>ときが！！」

「いつまでも下に見てるつもりなんだ！」 全集中<sup>ぜんしゆうちゅう</sup> 雷の呼吸<sup>かみなりのこきゅう</sup> 壱ノ型<sup>いちのかた</sup> 霹靂<sup>へきれき</sup>一閃<sup>いっせん</sup>

“ ”

鬼の間合いに入り片足を引き前傾の居合の構えから一瞬で頸へと間合いを詰めすれ

違い様に一閃する。

(斬られたのか?!俺が!あんな餓鬼に!!くそくそくそ!!!これも全部鱗滻のせいだ!許さん許さん許さん!!!)

「はあ、はあ、倒せた。⋮⋮危なかつた」

今までの鬼とは比べ物にならない戦闘をして、どつと疲れが押し寄せる。

「倒したのか」

「何とかな」

狐面も安心したような表情を浮かべている。

「刀が折れたんじゃ戦えないだろ。これからは一緒に行動しよう」

「あ、ああ。そうしてくれると助かる」

冷静になつていた狐面は俺の話に素直に乗つてくれた。狐面の男の名前は鏑兎と言  
うらしい。そして、彼が言うには藤巻山の鬼は大方倒したはずだと。

「でも、全部じやないんだろ。今みたいのがいないと限らないし油断は禁物だな」

「そうだな」

鎧兎は崩れゆく異形の鬼を少し気にかけていたが俺と共にその場を後にする。

鎧兎の言つた通り襲つてくる鬼は殆どいなかつた。何故、鬼がないと分かつたのかと尋ねると彼は自分が倒したからだと言つた。凄い奴もいるんだと思つたのと同時に自分を磨かないといけないと言うことも分かつた。

それから鎧兎とは数日間一緒に行動したせいか、色々な話をした。自分達が何故鬼殺隊に入りたいのか、互いの流派の修行はどうだつた、とか様々な事を語り合つた。こうして、最終選別の合格条件の七日間は終わりを告げた。

朝日が昇つたのを確認して最終選別が始まつた場所へと戻ると、七日前と同じ人数とあの時の女性がいた。

「お帰りなさいませ。そして、おめでとうございます。ご無事で何よりです」

女性は此処にいる全員の合格を告げると、皆安堵した空気に包まれる。

「まずは隊服を支給させていただきます。体の寸法を測り、その後は階級を刻ませていただきます。階級は十段階ございます。甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸。今現在皆様は一番下の癸でござります」

そんな空気を壊すかのようにてきぱきと鬼殺隊の隊服についてと鬼殺隊の階級につ

いての説明を受ける。

「さらに今から鎌鴉をつけさせていただきます」

パン、パンと女性が手を叩くと上空を舞っていた鴉が一斉に俺達目掛けて降りてくる。

「鎌鴉は主に連絡用の鴉でござります」

降りてきた鴉はあたかも当然のように俺の肩に止まっていた。  
「では、あちらから刀を造る玉鋼を選んでくださいませ。鬼を滅殺し、己の身を守る刀の  
鋼は御自身で選ぶのです」

最初に来た時にはなかつた机がいつの間にかあり、その机の上にはゴツゴツとした石  
のようなものが用意されていた。

いきなり自分で選べと言われて困惑しているようだつたが、俺は直感に任せて鋼を一  
つ取り女性へと手渡す。

「刀が出来るまで十日から十五日程度ようしますのでございました」

刀はすぐにはできないとの事だつた。なので、爺さんの元に戻つたらまた修行に戻ることに決めた。鎧兜のような強さを少しでも身につけられるように。

俺が選んだことで困惑していた鎧兜をはじめとした面々も次々と鋼を一つ取り女性

へと手渡して行く。そして、藤巻山での最終選別と鬼殺隊入隊の準備が終わり各々が隊服を持ち帰り帰路へとつくことになった。



「そうかい。最終選別は全員が生き残ったのかい。凄いね。また、私の剣士達が増えた」報告を持ってきた鴉を撫でながらも、内心では驚いていた。

（まさか全員が生き残るなんてね。近年稀にみる成果だ。一体、どういう子達なんだろ  
うね）

詳しい報告がないので詳細は分からぬけど、いずれ会う子供達に思いをときめかせ  
る。

「会うのが楽しみだよ」

その思いを口にするだけで更に胸が高鳴つた。

## 初任務

「よく、生きて戻った！ 征十郎！」

最終選別から爺さんの元に戻つたらいきなり抱きつかれ戸惑つてしまふ。

「無事でなによりだ！」

最初は意味が分からず立ち尽くしているだけだったが、俺より背が小さい爺さんに目をやると爺さんの体が小さく震えているのが分かつた。爺さんは口では厳しい事をよく言つたり、強気なことを言つていたけど全ては愛情の裏返しだつていうことは分かつていて。なので、最終選別に行つた俺のことをあれからずつと気にしてくれていたようで、こういう形になつてゐるんだと思うと恥ずかしながらも抱きしめ返す。

「ただいま爺さん」

「ああ。よう戻ってきた」

最終選別が終わつてからずつと教えられた事を繰り返す日々が続けてゐる。何故なら、最終選別の時の事を爺さんに教えると異形の鬼の事は珍しく褒めてもらえたが、鎧兎の事を話すと目の色を変えたように「鱗滻の剣士に先を越されるとは不甲斐ない！」

刀が出来るまで修行をし続けろと言われる。

「まあ、そのつもりだつたんだけど。あの時の抱擁は何だつたのか」

「何をぶつぶつ言つとるんじや！」

刀の素振りをしながら愚痴を吐き出すと、後ろから爺さんに話をかけられる。

「びっくりするだろ！いきなり声かけるなよ！」

「びっくりする方が悪いのだ」

爺さんの悪びれもしない態度に呆れるが、今に始まつたことではないのでもう何も言わない。

「それで何の用だよ」

「客だ」

客？こんな所まで俺を訪ねてきたのか？

「はあ、刀が出来たから持つてきただ。早く来い馬鹿者」

「！そりか！出来たのか俺の刀！」

玉鋼を選んで十五日。とうとう刀が出来たようでわざわざ届けに来てくれたようだつた。

「あ、どうも。私は刀穴森かなもりと申します。征十郎殿の刀を打たせて頂きました。戦いのお

役に立てれば幸いです」

刀穴森さんの第一印象はひょつとこの面をつけた変な人。後々、爺さんから聞いた話だと刀鍛冶の人は皆ひょつとこの面をつけているらしい。



日輪刀は色変わりの刀と言われているらしい。使い手によつて抜刀した時に初めて色を帯びる。鬼殺隊専用の刀。

「日輪刀の原料は砂鉄と鉱石。太陽に一番近い山でとれます。『猩々緋鉱石』　『猩々緋鉄』　陽の光を吸収する鉄を加えて日輪刀ができます。それらを採掘する山、陽光山は一年中陽が射していますし、曇りませんし、雨も降りません。と、説明はここまでにして、ではどうぞ抜いてみて下さい」

刀穴森さんの説明を一通り受け、造られた刀を受け取る。鐔は長方形連結型で色は金色。柄は白色。そして、金色で三角のモチーフが施されている。柄頭は金。鞘は黒色。受け取つた刀を意を決して抜くと刀身は深い黄色へと変わり、鎬に稻妻のような模様浮かび上がる。

「ああ。良い色だ。鮮やかさを表現する稻妻模様。鬼を滅する覚悟が伝わってくる良い

色、良い模様だ」

「……これが俺の刀」

最終選別の時使っていた刀は、最終選別が終わって爺さんの元に帰ってきてすぐに返却した。

「では、私はこれで失礼します」

「刀穴森さんありがとうございます」

礼を言つていると空から鴉が舞い降りてくる。

『カアアーーー！瀬田征十郎！指令ヲ伝エル！北ノ町へ向カイナサイ!!鬼狩リトシテノオ最初ノ仕事ヨ！心シテカカリナサイ!!ソコデハ毎夜毎夜、子供ガキエテイルウ!!』

「えつ。鴉が喋つてるんだけど

「気にするでない」

鴉からの鬼殺隊、最初の指令を受け準備にすることになつた。

—翌日—

「爺さん。今までお世話になりました」

「師範と呼べと言つとろうが！……だが、今は孫を見送る爺さんでいたい」

「爺さん」

鬼殺隊に正式に入隊したことによつて、爺さんとの生活に終わりを迎えることになつた。

「一つ儂からの助言だ、征十郎。雷の呼吸が全て出来るからといつて驕るなよ。一つ一つ極め抜け極限まで達してみろ強靭な刃としろ。お前ならきっと出来るようになると僕は信じている。頑張れ征十郎」

「期待に必ず応えてみせる。じゃあ行つてきます」

爺さんがいなければ生きながら死んでいただろう、爺さんがいなければ鬼殺隊にも入れなかつた。爺さんは俺を救つてくれた人だ、恩人だ。そんな人に恥じない生き方を見せる為に、隊服の上から爺さんお揃いの羽織に袖を通して別れの挨拶を済ませ爺さんと暮らしてきた山を後にした。

## ——北の町——

日が傾きかけた頃。

「ここであつてるのか?」

『カアーー! アツテるワ! ガンバリなさい! 征十郎!』

「分かつたからもう黙ってくれ」

此処に来るまでにずっと喋り続ける鴉にうんざりして、子供が消えるという町に足を踏み入れる。

「すいません。みたらし団子ください」

「あいよー!」

鴉に言われた通り北の町へと来たわけだがこの町の一体何が起こっているのか状況を調べるために町で商いをしていた茶屋の軒先で休息しつつ、何か変わったことが町で起きてないか店主のおじさんに聞くと急に顔が青ざめる。

「お客様。あんたよそ者だろ。悪いことは言わねえ。早くこの町を出た方が良いぞ」「へえー。何ですか?」

「どういう訳かわからねえが最近この町では子供が消えてるのさ。だから、よそ者が来ると連れ去りに来たんじやねえのかと疑われるんだよ」

そういうと店の奥へと姿をけしてしまう。

「はいよ。みたらし。それ食つたらこの町でなよ」

「考えておきます」

しばらくして注文したみたらし団子とお茶を持つてきてもう。それをゆっくり食しながらこの町の鬼の事を考えていると

「あの。すいません。うちの子来てませんか?」

「また、あんたかい。来てないよ」

「じゃあ、見かけてませんか?」

「見かけてもない」

茶屋に綺麗な女性がやつて来て店主と話をし始める。聞き耳をたてるのは失礼だと  
思いながらも、意識はしつかりと会話に向ける。  
「分かりました。何度もすいません」

「いや、気にしないでくれ。どこに行つちまつたんだろうな。娘さん」

女性は店主のおじさんに頭を下げてその場を後にしてしまった。

「おじさん、さつきの人は」

「ああ。さつき話したる。あの人の娘さんがいなくなつたんだよ。確か、一昨日だつたかな」

「へえ。あ、ご馳走さまでした」

みたらし団子を急いで食し先程の女性を追つた。

「すいません。失礼だとは思つたのですが茶屋での話を聞いてしまいました。それで良かつたらなんですけどさつきの話を詳しく聞かせてくれませんか?」

「えつと、貴方は?」

「俺は瀬田征十郎と言います」

女性の名前はきよ。一人娘の凜ちゃんが一昨日から帰つてきてないのだという。

「娘さんは最後どこに行つたのか分かりますか?」

「あの日はいつも通り遊ぶと行つて出かけたんです。でも、夕暮れになつても、夜になつても帰つては来ませんでした」

話を聞いて考えていると。きよさんはある話をし始める。

「もしかしたらあそこに行つたのかもしないんです」

「あそこ？」

きよさんがいう場所とはこの町を出て少し進むと綺麗な小川が流れしており、いくつもの岩屋がある場所で子供達の遊び場になつていた時期があるらしい。

「でも、あそこは危ないから行つては駄目だと行つて聞かせましたし、そんなはずはないんですけど」

「そこへ行つてますので場所を詳しく教えてください」

きよさんは一緒に行くと聞かなかつたが、流石に夜になるといつ鬼が出てくるのか分からぬいし、危ないので家に戻り、旦那さんと待つていてほしいと伝えて教えられた場所へと急いで向かう。

すっかり日がくれ夜になつてその場所へとたどり着く。

「ここか」

その場所は教えてもらつた通り、綺麗な川で近くには花々が咲き誇つていた。

「凛ちゃん！ いたら返事をしてくれ！」

呼びかけは夜の川辺に虚しく響くだけだつた。

“ こつちにおいて 、 こつちにおいて ”

「！」

突如、怨念じみた声が何処からか聞こえてくる。俺を呼んでいるのかその声を頼りに川辺を進むといつのまにか岩屋へとたどり着いていた。

“ さあ、奥へおいで ”

岩屋から響く声が中へ来いと誘う。

最初に声を聞いた時からすぐに鬼だと分かつっていた。刀をいつでも抜けるよう柄に手を当てたまま奥へと向かう。

「ああ。来てくれたのかい」

「お前鬼だな。消えた子供達を返せ」

岩屋の奥へと進むと開けた場所へとである。

「なんだ。人間かと思つたが鬼狩りかお前

「質問に答える。消えた子供達を返せ」

姿は若い女性の姿だが、その容姿ではあり得ない白く長い髪を翻して挑発した様子で

俺を睨みつける。

「消えた子供達を返せえ。ぶつあはははは！ 生きてるわけないだろ！ 馬鹿じやない!! 全部食つてやつたわ！」

「嘘よ!!」

「?」

聞き覚えのある声が背後から響き、慌てて振り返ると

「きよさん！ 何で此処に!?」

「……めんなさい。征十郎君。気になつて跡をつけてきたの」

「ふふふ。何だ普通の人間か。大人の肉は不味いから食わない主義だけど特別に鬼狩り共々食つてやる」

何故きよさんが此処にいるのかと思ひながらも、彼女を庇うように立ち鬼と向かい合う。

「り、凛を返しなさい！」

「凛。凛。誰のことかしら」

「一昨日、川辺にいたんでしよう!」

そこまできよさんの話を聞くと女の鬼はニヤニヤとしながら思ひ出したようだつた。  
「ああ。あの花で冠作りに夢中になつて、帰るのが怖くなつて泣いていた娘のこと？」

一呼吸をおいて、舌なめずりする女の鬼。

「あんた達と同じように岩屋から呼んであげたら、来てくれたから食つたわ」

「うわあああ!! 人殺し! 人殺し!! この人殺し!! 凜を返せ! 凜を返してよ……お願いよ  
……」

「その子が教えてくれたわ。お母さんの為に花で冠を作つたつて。ほら、そこにあるで  
しょう。汚らしい花の冠が! 馬鹿な子ね! こんな物を作るために死んで!」

「お前が殺したんだろ。それより何で子供ばかりを食らう」

きよさんは凛ちゃんが鬼に食われたと知り泣き崩れてしまう。きよさんの気持ちを  
考えると怒りが湧き上がるがそれを何とか堪え、何故子供ばかり食うのか訪ねると今度  
は嬉々とした表情を浮かべて

「だつて、子供の肉は柔らかいし美味だわ。それにその親の絶望する姿! 楽しいじやない  
い! ねえ、教えてよ! 今、どんな気持ち!! 憎い、悲しい。滑稽ね! あははは!!」

「　　”全集中雷の呼吸 肆ノ型 遠雷”　　」

雷の呼吸で得た力を逃さないようにしつつ、体を捻る。そして、拔刀術の構えから一  
瞬で刀を振り抜くと共に溜めていた雷の力を自分を中心とした場所から広範囲に飛ば  
す。

「! があああ!!」

「地獄に落ちろ！下衆が！」

鬼は強度の雷に打たれ、原型を無くすほど焼き爛れるが  
「もらつた！」

「舐めるんじゃないわよ!!」

焼け爛れた筈の鬼に間合いを詰めて頸を斬り落とす刀を素早く躱してみせる。

「はあ、はあ、よくもやつてくれたね！」

最終選別の時は比べものにならない回復力で焼け爛れた体を修復してしまう。

「何だいその顔は？ああ、藤襲山の事か。あんな雑魚鬼と私を一緒にするんじやないわ  
よ!!」

女鬼は俺の心を見透かしたように笑みを浮かべる。

「見せてあげるわ！私の力を　　”けつきじゅつ  
　　血鬼術　　”どつかそう  
　　毒華爪　　”どつかそう

異能の鬼が使う特殊な術。人を沢山喰べた鬼が血鬼術に目覚めると爺さんから聞いたことがある。

女鬼の血鬼術。それは爪。爪が異様に長くなつた。

「きよさん。辛いのは分かります。だから、危ないのでここを動かないでください」  
「驚かないのね。まあ、良いわ。この爪で引き裂かれて死ぬが良い」

(消えた!?)

先程まで立っていたところから鬼がいなくなつてしまい必死に探す。

(どこだ！どこに！……上か！)

「ちつ！」

刀の構えを上段にして迫り来る爪を薙ぎ払う。

(何だ。爪を止められたのに驚きが少なかつた。まだ何か能力があるのか？)

「へえ。中々やるわね」

弾き飛ばされた女鬼は意外そうな表情を浮かべていたる。

「でも、私の爪の本質は分からぬようね。止まつてゐる暇はないわよ！」

「！」

攻守交代といったところか怒濤の攻めを受けける防戦一方となつてしまふ。幸いなことに女鬼の意識は今のところ俺にだけ向けられているようで、移動しながらの戦闘となつてゐる。

「これでお終いよ！」

「！」

一瞬の隙を突かれ無防備な状態で女鬼の攻撃を受ける事になってしまった。背後は岩。目の前には鬼。万事休すかと思つたが

「ちつ！・また避けるなんてね。反射が良いのかしら」

「はあ、危なかつた。……！その爪！そういう事か！」

咄嗟の判断で身をしやがめて爪を躱すことが出来た。

「そう。私の爪には猛毒があるのよ。まあ、分かつたところでどうしようもないけどね！」

目線だけを鬼に向けると、この鬼の本当の血鬼術を知ることができた。その理由は、俺がいたら串刺しになつていたであろう場所に爪が刺さり岩が焼けるような音を立てて溶けているから。

「でも、今なら爪は必要ないわね。貴方、早く体勢立て直した方が良くない？背後には岩、前には間合いが詰まつた私。そして、私の目の前でしやがんだ貴方。さて、質問です！今から貴方は何をされるでしょう！」

（不味い！）

「遅いわよ!!!!  
がつ!!!」

その場から逃れようとしたが、鬼の身体能力のまえにそれは叶わず、鋭い蹴りをくら

い頭部を岩にぶつけてしまった。

『起きなさい！征十郎!! 目を開けなさい!!』

：母さん

蹴りを食らつて頭がおかしくなったのか、死んでしまった母さんの声が聞こえる。

『征十郎。良いの？人を守れなくて。また、あの日と同じ思いをするの？』

：嫌だ！俺はもう誰かの死ぬところを見たくない！だから、爺さんの厳しい修行にも耐えた！仇を討つために歯を食いしばって必死にやつてきた！

『そう。でも厳しいことを言うわ。だつたら、もつと頑張りなさい！極限まで極み抜け、誰にも負けないほどに!! もう何も失わないよう!! 誰にも触れられないくらい速く。ただ速く!! 誰よりも強く守り抜きなさい!!』

：極限まで極めろ。爺さんからも言われたよ。母さん

『あの人には期待してない人にそんな事言わない。だから信じなさい自分を！貴方なら出来る！だつて母さんの子だから！』

分かつたよ。母さん。

自分を信じる。誰かを守る。それだけで今まで以上に強くなれた気がした。

「あ。夢か？・！」

あの攻撃でどれくらい気を失っていたのか、ゆっくりと目を開けると女鬼がきよさん  
にゆつくりと近づいて行くのが視界に入る。

「ははは！鬼狩りは死んだ！もう誰も助けに来ない！お前も殺してから食つてやろう」  
きよさんは未だ凛ちゃんの死が受け入れられず、泣いている。  
(もう誰も死なせない！俺が守る!!)

「おい。何勝手に殺してんだ」

女鬼は俺が生きてることに驚いているようだつた。

「へえ。生きてたの貴方」

「何が面白いんだ。ニヤニヤして。俺が生きてることがそんなに面白いのか？そんなに  
親が子供の死に涙するのが面白いか？そんなに子供が親を思うのが面白いか？」  
「(何こいつ！気配が変わった!!空気が揺れてる!!)」

「　」 全集中 雷の呼吸 いちのかた 霹靂一閃 へきれきいっせん 八連 はちれん 」

もう、何も失わない。もう、誰も死なせない。託されたものもに応える為にだからこそ踏み出す。岩屋の中に雷が落ちるような音が鳴り響く中、最後の一閃だけは頸を狙い斬り落とす。

(速すぎて分からなかつた！斬られたこの私が！)

「今度こそ地獄に墮ちろ」

頸を斬つたことで安心してきよさんの元へと向かう。

「きよさん。帰りましょ。凛ちゃんも生きて欲しいと願つてゐるはずです」

凛ちゃんが作つたという花冠を持ち、泣き崩れるきよさんの目線に合わせる為片膝をついた。

「つ！」

「貴方に凛の何が分かるのよ！何も知らないくせに!!知つた風に言わないでよ!!!」

凛ちゃんの名前を出すときよさんから力を込めたビンタをくらい視界がぶれる。

「そうですね。俺は凛ちゃんに会つたこともない。喋つたこともない。……でも、この花冠はどういう気持ちで造つたかは分かる。母親である貴方を喜ばせたかつた。子供は母親が大好きです。そんな気持ちが現れている花冠だ。だから、きよさん。凛ちゃんが大好きだつた人のまで居て下さい。悲しくても生きて下さい」

結構力強いビンタを食らつたけど痛む頬を気にすることなく、すぐにきよさんと向き合い想いを伝えるときよさんは固まってしまう。

「征十郎君。そ、そのご、ごめんなさい。私！」

「良いんです。さあ、帰りましょう」

「え、ええ」

持つていた花冠をきよさんに渡して共に岩屋を後にした。

町に戻つて、きよさんの家に連れていかれ町医者に頭部の怪我を診てもらうと骨に異常はなく、いくつかの動作を確認して脳にもダメージはないだろうとのことで、怪我は

少し岩で切れている箇所がある。という診断だつた。

「氣を使ってもらつてすいません」

「良いんです。お世話になつたから」

きよさんは岩屋があつた事を旦那さんにも伝えると、最初は旦那さんも動搖して信じられない様子だつたが、きよさんが抱きしめると堰を切つたようように涙を流していた。

「じゃあ、すいません。俺はもう行きます」

「ええ。あの人のことなら任せて」

頭に包帯を巻いて治療を終え、きよさんに旦那さんのことを任せることにする。

「お世話になりました。じゃあ、きよさん。お元氣で」

きよさんに頭を下げてその場を離れる。

「ねえ。征十郎君。貴方も大切な人を亡くしたのね。そうじやなきや、あんな悲しい表情はしない」

私がビンタした時、怒りもしないで諭すように話してくれたあの時の表情。

「辛いのにあんな子供が頑張ってるんだから。私も辛いけど前に進むわ」